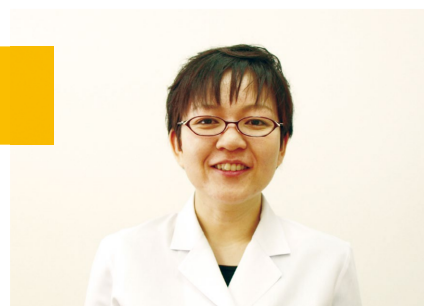


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第21回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



思いがけず言われる「ありがとう」がある。

たとえば、ステロイドを使っていて口腔内カンジダの初期症状が発現し、内服ゲルの処方が始まった終末期の患者さん。本人は意識状態が悪く、定期使用管理は望めず、ご家族の介護力も小さい場合、訪問看護師の方に使用をお願いすることがある。「〇〇さんに口腔カンジダが出てしまいました。早めに抑えたいので、明日からできればゲルを1日4回口の中に塗ってほしい。朝と夕の点滴のタイミングで、訪問看護師さんの管理で使っただけですか」。保険点数が取れるわけでもないこんな依頼にもかかわらず、訪問看護師の方からは、「わかりました。ありがとうございます」と返される。

たとえば、医師の定期診療で新しい内服薬が処方されて、調剤室で薬をつくらうとしたときに、「この大きさの錠剤は、あの患者さんには飲み込みにくいかもしれない」と気づき、かなり遅い時間に疑義照会で剤形変更を提案する。すると、医師は「△△の主訴を軽くするための処方だから、同じような効果が期待できる薬であれば成分も剤形も、患者さんが飲みやすいものに変更してかまわない。あなたの提案の薬の用法用量でファクスをください。ありがとう」。

*

これらの「ありがとう」はきっと、「患者さんのために考えてくれてありがとう。骨を折ってくれてありがとう」なのだと感じる。患者さんのケアに責任感がなければ出てこない言葉だ。さて、私たち薬剤師は、その言葉を普段から発しているだろうか。

他社の薬局薬剤師と話をした際、これからの薬剤師は

「薬の専門家ではなく、薬の責任者になる必要がある」と言われた。そのとおりだろう。

*

患者さんの枕元で働くようになって、以前の自分と比較し、その責任は大きくなった。責任と仕事のやり甲斐は表裏一体のように思う。在宅緩和ケアの担い手になる薬局薬剤師をたくさん生み出すために、この「責任」、「やり甲斐」をどう伝えるのが良いのか、ここ何年か悩みながら働いている。しかし、しばしば私の浅はかな悩みを軽々と越えて成長する後輩たちの姿に励まされることがある。

ある患者さんの急な体調変化で緊急対応があり、翌日にご家族と緊急カンファを開くことになった。担当薬剤師は社会人3年目の、在宅業務が初めての若者。緊急カンファの日は彼の定休日だった。私なりのフォローのつもりで彼には予定どおり休むように話すと、彼はしばらく逡巡した後、「やっぱり（カンファに）参加させてください」と言った。なぜ、とは聞かなかった。でも、うれしかった。初めて担当した「あなたの」患者さんだものね。そう思った。座学では伝えようのない仕事の芯の部分が、彼にはしっかり伝わっているのを実感した。

これからの私の仕事は、優秀な彼らとそのさすががしいホスピタリティマインドを折ることなく働けるように個人にかかる負担を減らしつつ、やり甲斐を損なわない体制を整備することだろう。訪問看護ステーションや在宅療養支援診療所をお手本に近い将来、「町が病院になるとき」、「町が看取り現場になるとき」に向け、永続性のある「薬の責任者」が活躍する体制をつくりたい。